



*Hidefumi Toki Little Boy's Eyes*

Ryo Ogihara      May Inoue

1. Beautiful Love (W.King / V.Young / E.Alstyn)
2. The Guitar Man
3. Wyeth
4. The Man with a Little Boy's Eyes
5. Smoke Gets in Your Eyes (J.Kern)
6. Sunny (B.Hebb)
7. C Minor
8. My Foolish Heart (V.Young)
9. You'd Be So Nice to Come Home to (C.Porter)

All compositions written by Hidefumi Toki except described

**土岐 英史** Hidefumi Toki  
alto & soprano saxophone

**萩原 亮** Ryo Ogihara  
guitar

**井上 銘** May Inoue  
guitar

Produced by Akiomi Hirano  
for Days of Delight

COMPACT DISC DIGITAL AUDIO      DOD-015 ¥2,500 (税込 ¥2,750)      R-2130190MT

[21.5.13] ① MANUFACTURED BY DAYS OF DELIGHT      © 2021 DAYS OF DELIGHT      MADE IN JAPAN/STEREO

このCDは一定期間貸与非許諾商品ですが、この期間経過後も権利者の許諾なく賃貸業に使用すること、また個人的な範囲を超える使用目的で複製すること、ネットワーク等を通じてこのCDに収録された音を送信できる状態にすることは、著作権法で禁じられています。

# Hidefumi Toki Little Boy's Eyes

1. Beautiful Love (W.King/V.Young/E.Alstyne)
2. The Guitar Man
3. Wyeth
4. The Man with a Little Boy's Eyes
5. Smoke Gets in Your Eyes (J.Kern)
6. Sunny (B.Hebb)
7. C Minor
8. My Foolish Heart (V.Young)
9. You'd Be So Nice to Come Home to (C.Porter)

All compositions written by Hidefumi Toki except described

Produced by Akiomi Hirano

Recorded at NK SOUND TOKYO  
on 28,29 October 2020  
Recorded & Mixed by Neeraj Khajanchi  
2nd Engineer: Yuuki Hosoda  
Mastered by NK @ AQQA Mastering



Art Direction & Design : Hiroshi Kurisaki  
Photograph : Takeo Hibino

荻原 亮  
Ryo Ogihara  
guitar (left)

井上 銘  
May Inoue  
guitar (right)  
appears by the courtesy  
of ReBorn Wood Inc.

土岐 英史  
Hidefumi Toki  
alto & soprano saxophone



## 管理ではなく統率、エンジンは愛情

どんなサウンドが立ち現れるのか、じっさいにスタジオで音を出してみるまで見当がつかない。そんなレコーディングは今回がはじめてでした。なにしろリード楽器のサイドマンがギター2本だけ。ベースもドラムも、ピアノさえもないのです。

半世紀をジャズとつきあってきたけれど、「サクソ+2ギター」などという組み合わせは耳にしたことがありません。唯一コールマン・ホーキンスと同時代のテナー奏者バド・フリーマンが60年代に吹き込んだアルバムがあると後に教えてもらいましたが、超レア盤ゆえいまだに聴けずじまい。いずれにせよ、ほとんど前例のない編成であることはまちがいないさそうです。

もともと土岐英史は珍しいからやろうと考えたわけではありません。単純にあのふたりと演りたい、と思っただけ。「ギタリスト同士が遊んでいるのをたくさん見てきて、そのなかに入っていくイメージが浮かんだんだよ。あのふたりはとにかく身体からだのなかでサウンドが鳴ってるからね。音色の問題でそこにサクソがうまく乗られるかどうかだけが心配だったけど、まったくの杞憂だった。音を出した瞬間から、ただただ楽しくて」。

じっさいスタジオは、ギターふたりの“遊び場”に土岐さんが「オレも混ぜて」と遊びにきたような雰囲気、3人ともじつに楽しそう。リラックスした空気の中、1テイクでどんどん進んでいきます。

その様子をコントロールルームから見ていたのは、3人が生み出すクリエイティブなサウンドに瞬で魅了されました。はじめて接する「サクソ+2ギター」の軽やかで爽快なグルーブが、かつて経験したことのない感覚をひらいてくれたからです。

荻原亮と井上銘が織りなすビートは、たえず揺らぎ、跳ね、回転しながら自在に動きつづけます。それがこの編成の真骨頂であり、いわばバンドの“プラットフォーム”。サウンドの特性を決定づけているのは、やはりベースとドラムがないことでしょう。

クルマに喩えるなら、ドラムがリズムをキープし、ベースがボトムを支える編成は、高いボディ剛性で地を這うような高速コーナリングを約束するボルシェで、こちらは風を受けながらオープンエアで山道を駆けるブリティッシュ・ライトウェイト・スポーツ。どちらもドライビングの醍醐味ではあるけれど、快適さと楽しさのベクトルが真逆です。

これは相当楽しいにちがいない。演奏を聴きながらそう思いました。MG-Bやオースチン・ヒーレーに乗り込んで箱根ターンバイクを走るようなものだから、土岐さんが「ただただ楽しくて」と言うのもうぜんです。

こうしてつくられていく音楽は、きわめて空間的・彫刻的であることもわかりました。

音がぎゅぎゅ詰まったサウンドとちがって、余白がたっぷり空いている。そこに土岐さんの音が立ちのぼる。有機的なスペースがふんだんに空いているから空間的なひろがりを感じるし、ふたりのギタリストが柔らかく自由に動いているから、かえって土岐さんの音が彫刻的に浮き立って見える。

この状況を、井上銘は「この音像はこの編成にしかないな、という発見があった」と嬉しそうに言い、荻原亮は「ある種の“スカスカな感じ”が楽しい。聴いている人がいろいろイメージできるから」と表現しました。土岐さん自身は「この編成には想像力が働く」と言うけれど、それは聴く側もおなじ。揺れ動きながら瞬間瞬間に形を変える有機的なスペースは、双方にとっての想像力を受け入れるスペースでもあるのでしょう。

けっして偶然の産物ではありません。ふたりのギタリストは、サウンドの鍵が“間”にあることをよくわかっていました。隙間を埋めすぎないように、かといって過度に空けすぎないように、互いに相手の音を聴きながらバランスを取っていたと言います。「そろそろスペースを空けようか、みたいなことは勘でわかる。長いこと一緒にやっているから」と。

こうした類のないアンサンブルの構築に向けて、さぞ綿密な打ち合わせとリハーサルを

繰り返したにちがいない。音源を聴いてそう思われたかもしれませんが。しかし土岐英史はあえて“なにもしない”道を選びました。レコーディングは文字どおりのぶっつけ本番で、事前打ち合わせはいっさいなし。荻原亮も井上銘も、なにを演るのかさえ知らぬままスタジオに現れました。

ボスの土岐英史は譜面を配ってソロの順を決めるだけで、指示らしい指示を出すこともなくニコニコ眺めているだけ。いっぽうふたりはどちらがテーマを弾くかをジャンケンで決めるだけ。一方がいろいろな音色やタッチを試しながら慣らし運転をはじめると、もう一方がその音を聴きながら自分のトーンマナーを絞り込んでいく。そんな“対話”を繰り返していくうちに、いつの間にか絶妙なアンサンブルが出来あがっていったのです。

「今回はふたりのアイデアが大事なんだ。できるだけ彼らのアイデアを引き出したい。だからボクはなにも言わないし、なにも決めない。そのほうがぜったいにいいものになる。あのふたりくらいのレベルになると、下手に細かい指示を出すより自由にさせておいたほうがいいんだよ」。

レコーディング前に土岐さんがそう話してくれたことを思い出します。サイドマンとしていろんなリーダーを見てきたけれど、どのリーダーにもちょっとずつ不自由なところがあった。だから自分がリーダーのときはそうならないように心掛けているんだ、と。

とりわけギターブリークの土岐さんはギタリストに対するリスペクトが大きいのでしょう。それは彼らにも伝わっていました。収録後に荻原亮がこう言ったのです。

「好きなようにやらせてもらって、すごく楽しかった。なにより土岐さんが楽しそうに聴いていたのが嬉しかった。土岐さんはギターに愛情をもっている。それが肌で伝わってきたんです。だいいち、ギター2本とサックスでレコーディングしたいなんて考える人、いませんよね。聞いたことないし、そんな話（笑）。それくらいギターが好きなんですよ、土岐さんは」

荻原亮の素直な感想は、土岐さんのバンマス＝リーダーとしての資質と手腕がきわめて高い

ことを言い表しています。土岐さんと新しい作品をつくるたびに、ぼくはこの側面における土岐英史の才能を目の当たりにしてきました。

音楽の芯と個性はキープしながらも、編成の特性に応じて固有の表情や空気感を高い水準で結実させる。それがどれほどむずかしいことか。ジャンルはちがうけれど、プロデューサーとして多くのプロジェクトに携わってきたぼくには痛いほどわかります。

クリエイティブなプロジェクトを成功に導く鍵はわずかに3つ。良質なコンセプト、問題意識の統一、そしてモチベーションの喚起です。リーダーが為すべきは、この3つを担保したうえで、チームを統率すること。

立場と権威で組織を統制する「管理」に対して、「統率」は人間的な魅力や強度を含む概念で、構成メンバーの信頼と敬意を基本原理に集団を率いるメカニズムです。“まだないもの”を生み出そうとする創造的なプロジェクトにあっては、ルーティン組織のような「命令によるマネジメント」は機能せず、リーダーシップでチームを率いていくほかありません。

統率のエンジンは相互のリスペクト。土岐さんはそれを「愛情」と表現します。

「ボクは最小限のことしかやっていない。だからみんなが自由に振る舞えるし、だからおもしろいものになる。ただしそのためには、ボク自身がそのミュージシャンを愛していないとダメなんだ。“愛されている”ことはどうぜん相手にも伝わる。お互いにわかる。それが大事なんだよ」。

創作現場における土岐英史の態度はすぐれたプロジェクトリーダーのそれであり、ジャンルを超えた普遍性をもつものです。そしてそれこそが、30枚を超えるリーダーアルバムを遺すことができた最大の要因でしょう。

たんに指が動くだけでいい音楽はつukれない。その“あたりまえ”を土岐英史は体現しているのです。

平野 暁臣 (Days of Delight)  
Founder / Producer